正誤表

『東京大学言語学論集』37 号所載の下記論文について，以下のとおり訂正がありますので公開します。

氏家啓吾（2016）「北海道方言-rasar 構文の表す捉え方」『東京大学言語学論集』37: 261–279.

ページ	誤	正
p. 267	英語の中間構文のように、多くの言語の中間構文で動作主が表現されないことは、動作主がベースに含まれないということの反映である。	英語の中間構文のように、多くの言語の中間構文で動作主が表現されないことは、動作主がプロファイルに含まれないということの反映である。

（下線は編集委員会による）

2022 年 7 月 29 日

東京大学言語学論集編集委員会